



Title	貧困当事者が語る「貧困とはなにか」：参加型貧困調査を通じて [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	陳, 勝
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第15566号
Issue Date	2023-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90222
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	CHEN_Sheng_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：陳 勝

主査 特任教授 松本伊智朗
審査委員 副査 准教授 鳥山まどか
副査 講師 上山浩次郎
副査 准教授 佐々木 宏（広島大学）

学位論文題名

貧困当事者が語る「貧困とはなにか」

—参加型貧困調査を通じて—

貧困の研究は、貧困の渦中にある個人や集団の同定と測定を行い、貧困の直接的、間接的な原因、個人や集団の社会的特徴と直面している不利・困難などを客観的に把握したうえで、社会的な対応策を考察するという枠組みを取ることが多い。これは貧困を社会問題として可視化し、かつ解決すべき社会的課題として社会的関心を高めるという点で、一定の有効性を持つ。しかしながらこの枠組みは、貧困当事者を研究や施策の「対象」として扱うがゆえに、貧困当事者から見た貧困経験の意味、制約の具体的なかたち、主観的な屈辱や無力の感覚などが、研究から排除されがちである。こうした貧困当事者からの視点を欠いた貧困理解と言説は、貧困を他者化し、貧困と非貧困の間の分断をより強めることで、貧困当事者の困難をより深化させかねない。従って「専門知」に依拠した研究に加えて、貧困当事者が主体として参加する「参加型」の研究が重要になる。しかしながら、実際の実施上の困難を背景に、こうした「参加型」貧困研究の蓄積は乏しい。特に日本においては、参加型貧困調査を明確に意識した研究はほとんどないと言える。

こうした研究状況に対して、本論文は参加型貧困調査を実施し、貧困当事者の側から貧困を理解しようとする、意欲的かつ貴重な研究である。本論文ではまず参加型貧困調査の意義（序章）、先行研究の検討と実施上の課題が考察されたのち（第1章）、実際に設定した調査枠組みと調査実施上の留意点が詳細に解説される（第2章）。そののち、貧困当事者が理解する「貧困」の意味（第3章）、貧困当事者の貧困経験と主体的側面（第4章）、調査参加者から見た今回の「参加型調査」の意味（第5章）が考察され、まとめが行われる（終章）。また補論として、こうした貧困当事者から見た貧困理解を広く貧困をめぐる「政治」の中に位置づけて、貧困をめぐる「政治」を参加の観点から問い直す必要が提起される。本論文の評価しうる点は以下である。

第 1 に、問題設定の研究上の意義である。参加型調査の重要性については指摘されて来たものの、前述のようにその実施上の困難から日本においてはほぼその前例を見ない。綿密な調査設計をへて実施された本研究は、こうした研究状況に一石を投じる試みとして重要な意味を持つ。

第 2 に、調査設計と実施方法の確かさである。参加型貧困調査の実施に当たっては、「貧困当事者」の同定の方法、実質的な参加を保障するための環境整備と調査設計、当事者の主体的な側面を明確にしていくための分析枠組み等、考慮されるべき点が多い。本論文では日本における先行調査がない中で、イギリスの事例を参考にしながら、調査枠組みを設定した。そこにおいては以下の諸点が考慮されている。①貧困当事者の条件を本人が生活を営む上で経済的余裕がない、貧困と感じているという点に設定し、厳密な定義をあえて避けることで貧困と非貧困の間の分断線を強化することの回避を試みている、②若者世代に対象を限定し、かつ性別や社会的区分（学生、労働者、国籍）ごとにグループを設定することで、貧困経験の同質性、同時代性を担保することで議論の拡散を防いでいる、③それぞれ 4 名で構成される上記のグループごとに貧困についての意見交換を行い、それを 3 回継続することで当事者間での貧困理解の言語化を図っている、④グループごとに調査の振り返り、意見交換によって得られたテキストデータのチェックを行い、テキストの精緻化を試みている、⑤参加の交通アクセスや経済的、時間的制約に対して最大限の個別的配慮を行っている。これらの点は、参加型貧困調査の先行例として今後の研究に大きな影響を与えると考えられ、審査の過程でも高く評価された。

第 3 に、上記のような調査枠組みの結果として、貧困当事者としての調査協力者の生活や考え、貧困経験の主観的意味、貧困や社会に対する「声」が、具体的に描きだされている。貧困が当事者にどのようなものとして認識されているか、この点を明示的に示したことは、学術的な貧困理解に大きな貢献をもたらすと考えられる。

第 4 に、3 回にわたるグループ討議という形式をとったことで、調査協力者が相互に考えを深めていくプロセスが示されている。このことは同時に、貧困者が受動的な客体ではなく、条件が設定されれば自らの声で貧困を語り理解を深めていく能動的な存在であることを示している。

一方で本研究の課題として、調査対象の限定による制約、ジェンダーや就労状況、家族類型といった社会的区分に添った分析が手薄であることが指摘された。また、今後の課題として、広く貧困をめぐる社会的言説と政治に位置付けた議論の必要が指摘された。こうした課題がありながらも、上述の学術的貢献が認められることから、本論文は先行する当該分野の研究の発展に大きく資すると高く評価される。よって筆者は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。

以上